様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ２ 日現在

機関番号：１４３０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０４４８４

研究課題名（和文）大名庭園の近代ー風景の「近代化」プロセスの検証

研究課題名（英文）Modernization of Daimyo Garden

研究代表者
小野　芳朗（ONO, Yoshiro）

京都工芸繊維大学・その他部局等・理事・副学長

研究者番号：５０１５２５４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,630,000円

研究成果の概要（和文）：大名庭園の近代とは何か、そこからみえる近代の景観の創り方とは何かを研究した。実例として、岡山後楽園、金沢兼六園、水戸偕楽園、高松栗林公園、彦根玄宮園、鹿児島磯庭園、広島縮景園、沖縄識名園を視察、対象とした。
近代とは、好みの時代である近世を通過し、公共の空間、あるいは文化財としてのせめぎあいが各大名庭園で繰り広げられるが、その使い方が近代であるということに結論付けられる。本研究では、これを新旧景観を比較しながら「図説大名庭園の近代」に編み上げていく作業を通して、近代のイメージとは何か、を検討することになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近代という時代を理解するために、大名庭園を取り上げた。景観の変遷、その理由、作り方を比較研究することで、近代は主体の意志、主体士老いの利害調整、伝説の依拠、それを裏付けていく学知の存在などが景観形成のドライビングフォースになることが理解される。また、将来的な景観形成のメカニズムを知ることが出来、景観保全・開発審議の方法に貢献できる。
都市史的には、大名庭園が、藩主の象徴的空間（幕府から天皇制）だることが文化財としての保全と、公園としての空間のせめぎあいを経て、オーセンティックな空間として議論され、そのメカニズムが天皇制国家からユネスコの国連を価値として学知が価値づけることを示した。

研究成果の概要（英文）：The investigation on the Daimyo gardens, the gardens by the Lords, on the change between Edo era and modern times after 1868 Meiji restoration was conducted on the Okayama Koraku-en, Kanazawa Kenroku-en, Mito-Kairaku-en, Takamatsu Ritsurin-kouen and Hikone-Genkyu-en. The team gathered the archives and photos of each garden and begin to prepare the publication. And also, we touched the each garden to compare the reason, motivation and mechanism of the changes thorough the modern times.

研究分野：建築学

キーワード：大名庭園

１．研究開始当初の背景

空間や風景はある意図のもとに作られていく。それが何かを象徴したり、物語ることである意図を空間の中に表象する。そうした行為が近代の特質ではないか。

大名庭園に関しては、それが植生を伴う景観であることから、authentiscity の問題があり、時代の積み重なりが現状の景観として表れており、表象的な景観分析だけでは正鵠を得ないこと、それゆえ学者による「価値」が付与されやすいこと、また近代についてはほとんど研究事例がない。さらに近世研究が文献史学によってなされているため、近世近代を通した都市の空間における大名庭園の位置づけとその性格の変化についても言及されることはない。

２．研究の目的

風景の「近代化」とは何か。それを大名庭園の近代を比較実証することで定式化し、景観検証システムの確立に必要な学術的知見を得る。

大名庭園は近世では大名の「好み」で構成されるが、近代になると旧藩主が徳川から天皇家の藩屏となったその象徴を空間的に表す場となっていく。また観光の視線が生まれ、学識経験者による「価値付け」や文化財指定という目的化が起こり、結果的に名勝などの形に収斂していく。どのように構成されてきたのかについて解析する。このことは、現代の重要文化的景観選定や世界文化遺産登録も同様のプロセスを踏み、景観の顕彰をどう実行していくのかという点で有益であると考えている。

３．研究の方法

対象を岡山後楽園、金沢兼六園、水戸偕楽園のいわゆる日本三名園に加え、高松栗林公園、彦根玄宮園とし、それぞれの庭園担当者を決めて、事例報告を行った。

また、対象庭園に加え、広島縮景園、鹿児島磯庭園、沖縄識名園、東京小石川後楽園、六義園への視察を実行した。

最終的な成果物として「図説大名庭園の近代（仮）」を商業出版することを決め、2 年目より出版社編集とカメラマンを加え、大名庭園の近代とは、という議論とともに、近代的な庭園をビジュアルで表していく作業を通して、大名庭園の近代とは何かの問いに答えることとした。

４．研究成果

事例報告の中で共通してきたのは、近代には象徴的な「伝説」が付着すること、それは明治天皇行幸による新聞報道で、一躍有名となった日本三名名園の事例や、水戸や彦根のように、徳川光圀、井伊直弼という地元にとっての英雄であり、それらは、兼六園での明治紀念標　日本武尊像や、光圀像、として表れる。また時代とともに顕彰されていく栗林公

園の松平頼寿、井伊直弼の銅像である（後楽園は池田綱政像の寄付の申し出が近年あったが断れた）。それらは近代の中でも時代性を象徴する。明治は明治天皇、そして藩祖。また幕末の悪評を挽回するための再顕彰であったり、 authenticity を目指す近年は銅像そのものを否定していく。

また建物が出現するのは庭園が「公園、広場」の機能を有するからである。私有物であるときの庭園は大名の好みで景観形成されるが、公的機関の所有となる近年は、公的空間の様相を呈する。明治時代に物産館や県会が設置される。一方、最近は庭園を元の姿に戻すという議論が出てくる。これは極めて大名庭園の近代とは、そしてこれからとは、また景観とは学界の見解によって形成されるという事例である。元に戻すということは、借景も復元する必要があるが、すでに都市化され周辺はビルが林立している。広島縮景園の風景はビルに囲まれ、みじめな様相である。岡山後楽園は歴史的にない高い常緑樹で庭園を囲っている。庭園の中の植生を復元することは可能でも、囲繞する真竹の風景は不可能である。彦根玄宮園は琵琶湖の内湖に通じていたが、そこは埋め立てられ住宅地になり、そちら方向の景観ではなく、彦根城を仰ぐ景観が今や代表的アングルである。

研究班は庭園視察で近代的な物を探してきた。しかし、それは煉瓦の壁であったり、おそらく近代ではあるが、構造物で近代を表現しきれるわけではないことも理解した。

出版編集の段階で近代とは何かを象徴する事項、それは近現代人の行為であると議論した。

出版の編集の過程で、そのビジュアルな構成を①四季　庭園のオーソドックスな一般のイメージを典型的四季の風景として表す。②夜景　江戸時代にはない景観で、現代的な風景で、イベントである。③行楽　彦根におけるヒコニャン、結婚式の背景など現代的な景観の使われ方である。④観光　観光客の撮る撮影風景の典型を抽出する。⑤都市　鉄道による観光客移送、林立するビル群など都市的環境と庭園との関係、⑥銅像　先に示した顕彰される人物像　⑦建物　近代の建物と復元される江戸期の建物

など、大名庭園の近代の風景の作り方は、その環境と使い方のニーズと相関していることが表される。

５．主な発表論文等

〔図書〕（計１件）思文閣出版「大名庭園の近代」小野芳朗・本康宏史・三宅拓也　2019年4月　４５１頁

６．研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：中嶋節子

ローマ字氏名： Nakajima Setsuko

所属研究機関名：京都大学

部局名： 人間・環境学研究科

職名：教授
研究者番号（8 桁）：20295710

研究分担者氏名：三宅拓也
ローマ字氏名： Miyake Takuya
所属研究機関名：京都工芸繊維大学
部局名： デザイン・建築学系
職名：助教
研究者番号（8 桁）：40721361

研究分担者氏名：本康宏史
ローマ字氏名： Motoyasu Hiroshi
所属研究機関名：金沢星稜大学
部局名： 経済学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80711374